

～織田信長サミット2009に向けて～



小牧山

戦国に馳せる

岐阜市埋蔵文化財調査事務所

第13回 信長と岐阜(1)

所長 藪下 浩

信長と齋藤氏の決着

永禄6年(1563年)清須城から小牧山城に拠点を移した織田信長は、父信秀以来苦汁を嘗めてきた美濃齋藤氏の本格的な攻略に着手しました。

永禄7年、東美濃にある齋藤方の有力な城である鷺沼城・猿塚城を降し、永禄8年には加茂郡堂洞城を攻め落としました。

積極果敢な東美濃の攻略戦で美濃制圧の足がかりを得た信長のもと、永禄10年8月1日、齋藤方の重臣で西美濃三人衆といわれた、稲葉一鉄・氏家ト全・安藤守就が味方することを伝えてきました。

信長は、この好機を逃さず美濃尾張の国境を一気に突破、井口城下に殺到し、稲葉山城を包囲しました。東美濃、西美濃を攻略された齋藤氏の稲葉山城には、援軍の来る見込みはまったくありませんでした。

8月あるいは9月ともいいますが、城主齋藤龍興は、長良川を船で逃れました。

美濃攻略は父信秀の遺恨でもあったのですが、ここに信長は10年に及ぶ攻防戦の末、齋藤道三、義龍、龍興と三代にわたり美濃を支配した齋藤氏を追放することができたのです。信長は、稲葉山城を占領した後に、

城下の井口を岐阜と改めました。そしてこれを契機に「天下布武」の印判を用いるのですが、これは、尾張、美濃を支配下においた信長が「全国制覇」に本格的に乗り出すという強い意思表示にほかならないのです。



金華山頂の岐阜城

天下布武への大義名分

信長は、天下布武の足がかりとした美濃平定の前夜から北伊勢の制圧にも着手していたようですが、永禄10年11月、正親町天皇から「古今無双の名将」という賛辞と、尾張・美濃の皇室領地の復活と御所の修理を命じる綸旨(天皇の文書)が届けられました。信長は、この綸旨を得たことにより、ますます天下布武の意欲を高めたのではないのでしょうか。永禄11年2月、北伊勢に侵入した信長公の軍は瞬く間に北伊勢、中伊勢を支配したのです。

同じ頃、信長は、越前一乗谷の朝倉氏に身を寄せていた足利義昭から

室町幕府再興についての依頼を受けました。

永禄11年7月25日、信長は義昭を岐阜へ招いて、浄土宗西山派に属する勅願所として著名な龜甲山立政寺(岐阜市西荘)の塔頭正法軒に住まわせました。

ここに信長は、先には正親町天皇の綸旨により天下布武の道をかき立てられ、さらに足利義昭を保護したことで足利幕府を再興する、という大義名分を手にしたことになりました。

9月7日、信長は、尾張、美濃、北伊勢の兵に同盟の徳川家康派遣の三河兵を加えた大軍団で京を目指して岐阜を出陣しました。



立政寺山門

問合先 文化振興課(☎76 1189)